慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	徐訏と朝吹登水子の交流をめぐって
Sub Title	The relationship between Xu Xu and Asabuki Tomiko
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.239 (18)- 256 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	髙橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

徐訏と朝吹登水子の交流をめぐって

杉野　元子

1. はじめに

徐訏（1908年～1980年）は、中編小説『鬼恋』（1937年）、長編小説『風蕭蕭』（1943年）などで一世を風靡した人気作家[1]であり、朝吹登水子（1917年～2005年）はフランソワーズ・サガン、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品の翻訳などを手がけた著名な翻訳家である。旺盛な文筆活動を続け、数多くのすばらしい作品を残したこの中日の文学者は、1937年冬、ほんの短い期間ではあるが、パリで濃密な時間を分かち合った。このことは、二人の共通の友人である鮑耀明が1991年8月、「想起徐訏」（『大成』213期）を発表したことがきっかけとなり、世に知られるようになる。その後鮑耀明は、「談徐訏早年一段異国情縁」（『香港文学』162期、1998年6月）、「徐訏早年一段“異国之恋”」（『魯迅研究月刊』2009年第7期）を発表した。この3つの文章は内容に重なりが多いが、いずれも朝吹登水子の自伝的小説『愛のむこう側』（新潮社、1977年）に徐訏をモデルとする人物・兪が登場すること、そして兪がパリで朝吹をモデルとする主人公の紀川紗良と出会い、紗良に激しくも切ない恋愛感情を傾ける様子が描かれていることを明らかにするとともに、その場面が描かれている第三章の一部を中国語に訳して掲載した。また、徐訏が1938年1月2日、フランスから船で帰国するさい、インド洋で書いた詩「寄T.S.」の「T.S.」がTomiko Sanであることも明らかにした。

徐訏と朝吹登水子の交遊については、呉義勤・王素霞『我心彷徨 ── 徐訏伝』（上海三聯書店、2008年）、馮芳「徐訏羅曼史叢考」（『華文文学』133期、2016年2月）、杉村安幾子「徐訏と朝吹登水子」（『お茶の水女子大学中国文学会報』36号、2017年4月）などの先行研究においても、朝吹の自伝的小説『愛のむこう側』を参照しながら言及がなされている。また杉村安幾子は同論考において、1943

年3月から重慶の『掃蕩報』副刊で連載を開始、翌年、成都東方書店から出版された徐訏の長編小説『風蕭蕭』に「朝村登水子」と名乗る女性が登場する、という興味深い指摘をおこなっている。杉村安幾子は、『風蕭蕭』に朝吹登水子をもじった名前・朝村登水子が一カ所だけ唐突に出てくることについて、「徐訏の朝吹への恋愛感情及び失恋したことへの傷心が投影されている」[2]と指摘しているが、筆者も同じ考えである。しかし杉村安幾子は、作中において朝村登水子が殺されるという設定になっていることに着目し、このような設定は徐訏における朝吹という存在との決定的な別れになったと述べているが、朝吹が書き残したものを調べた結果、徐訏が1950年に香港へ移住した後、朝吹に手紙を出して連絡を取ろうとしたこと、また1958年に二人が香港で再会を果たしたことが明らかになった。さらに朝吹登水子と徐訏のご遺族のご厚意により、朝吹が徐訏に宛てた手紙と徐訏の日記を閲覧する機会を得たことにより、徐訏が亡くなる1980年まで、二人が交流を続けていたことが明らかになった。本研究では、これらの新資料も用いながら、徐訏と朝吹登水子の交流の足跡をたどるとともに、徐訏と朝吹の交流が二人にもたらした影響についても考察する。

2、パリでの出会い

徐訏と朝吹登水子を結びつけたのは、ソルボンヌ大学である。徐訏は1908年、浙江省で生まれる[3]。父親は有能な銀行員で、家は比較的裕福だった。1931年、北京大学哲学系を卒業した後、引き続き心理学系で2年間学ぶ。在学中から、詩、散文、戯曲などを発表していたが、1933年、北京を離れ上海へ移り、文筆活動を本格的に開始する。また雑誌『人間世』、『天地人』の編集に携わる。1935年、趙璉と結婚、長男が生まれる。1936年8月、フランスへ留学、ソルボンヌ大学で哲学を学ぶ。

朝吹登水子は1917年、東京で生まれる[4]。父親は大物実業家で、庶民とはかけ離れた裕福で恵まれた生活環境の中で育った。女子学習院を中退後、1934年、17歳で財閥の御曹司と恋愛結婚する。しかし新婚旅行を兼ねた約1年間の欧米旅行中、夫との無味乾燥な生活に堪えられなくなり、帰国後、離婚する。1936年、フランスへ留学、パリから60キロ離れた全寮制の女学校で学んだのち、1937年、パリに移り、ソルボンヌ大学の聴講生となる。

パリ留学時代の徐訏と朝吹の交流について、徐訏は具体的には何も語っていないが、朝吹は40年後の1977年、自伝的小説『愛のむこう側』を出版、第三章で紗良（朝吹がモデル）を見初めた兪（徐訏がモデル）が、紗良に夢中になり積極的にアプローチする姿を赤裸々に綴った。第三章の関連部分を以下、紹介する。

1937年、ソルボンヌ大学の聴講生となった紗良は授業後、一人でカフェに入る。すると東洋人の青年が近寄ってきた。その青年は大学都市のベルギー館に住む兪という名前の中国人留学生で、教室で二、三度見かけた紗良の後をつけてきて話しかけたのだった。金曜日の授業での再会を期して別れるが、当日、兪は風邪をひき欠席した。

翌週、社会学の授業で兪といっしょになり、授業後、二人はカフェに入る。兪は、自分は詩人のたまごだが、祖国が危機に瀕しているときに詩を書いてなぞいられない、学友たちと帰国することを考えている、と伝える。

ある日、兪は突然、紗良の下宿先を訪問する。兪は、日本人女性との付き合いを同胞から批判されていること、小さいころから日本人女性に憧れていたことなどを話し、紗良の左手を強く握った。

兪は再び紗良の下宿先を訪れるが、紗良は留守だった。中国語の詩と明日帰国するのでもう一度会いたい、というフランス語のメモを書き残す。帰宅した紗良はすぐに兪に電話をして、大学都市の駅で待ち合わせた。兪は紗良の左頬に軽く唇をあてたあと、「サラ、ぼくと結婚して重慶に来てください。お願いです。お願いです。ぼくは貴女をおいてパリを去ることはできない！」と叫ぶようにいう。紗良は敵国の人間である自分が抗日戦線に参加するために帰国する兪と行動をともにするなんて不可能だ、といって断る。すると兪はひざまずき、紗良の両脚に両腕を回し、慟哭しながら、「ぼくと結婚して重慶に来てください」と繰り返す。紗良が「あなたは私の大切なお友達よ」といって断ると、兪は紗良の額に唇をつけて、駆け去った。兪からは帰国の途上でしたためた詩が送られてきたが、その後は音信が途絶えた。

以上が第三章の関連部分である。小説の中で兪と紗良が会ったのはわずか4回であるが、兪は紗良の魅力に圧倒され、恋愛感情を募らせていく。いっぽう紗良は、「東洋人である親近感と、シナ人に対するある種の後めたさとを同時に感じ

てはいたが、兪を誘惑してみようといういたずら心もなかったし、彼に惹かれているわけでもなかった[5]」と、自分の感情を冷静に分析している。

『愛のむこう側』の中で描かれている兪と紗良の交際の模様は、多少の脚色はあるだろうが、おおよそ事実に基づいていると思われる。朝吹は随筆『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』の中でも、「戦前の一九三七年に、ソルボンヌで出会った許〔徐の誤り：引用者注〕という中国人学生が突然アルコス家〔朝吹の下宿先：引用者注〕に遊びに来た」[6]ときのことを振り返っているが、その状況は『愛のむこう側』に描かれている場面とほぼ重なっている。また帰国する徐訏との別れの場面についても次のように書いている。

> アルコスさんの家のすぐ傍の、大学都市の地下鉄の駅で許と別れた時、彼はほんとうに悲しそうだった。地面にひざまずいて私の両脚をかたく両手で抱きしめて、「重慶に来て結婚してください」と途方もないことを駄々っ子のように繰り返した。[7]

これらのことから、『愛のむこう側』はパリ時代の徐訏について、精度の高い貴重な情報を提供していると判断できる。この小説の中で、兪は2度、紗良に詩を献げている。2度目の詩は、「一月二十日インド洋でしたためられた、上海の消印のある二ページにわたる綿々とした恋の詩」である[8]。この詩は徐訏が1938年1月2日（小説では1月20日）、帰国途上の船上で書き、上海で下船した後、朝吹に送った詩「寄T.S.」で、小説の中でもこの詩の前半部分が引用されている。1度目の詩は、帰国前日、紗良の下宿先を訪れたさい、紗良が留守だったので、紙に書いて置いていったものである。この詩について、小説の中では「孤独な男の心境らしく、物想いにふけっている様子だが、無線云々はラジオのことらしく、向いのアパルトマンの赤子の声とラジオが空々しく聞える、といったもので、紗良にはその詩の文学的価値を判断する力はなく、兪の実感は伝わって来なかった」[9]と書かれているが、この詩は、おそらく徐訏が1937年12月15日に書いた詩「偸望」であろう。「偸望」は、物思いにふける孤独な男の心境を綴った詩で、「向かいのアパルトマンの赤子の声」という一節はないものの、「沿路的無線電（街頭ラジオ）」からは管弦楽が流れているが、自分は楽しむ心のゆとりがない、という一節はある。

「偸望」は口語自由詩で、現代中国語がわからないと、読解は困難である。この詩を受け取った朝吹も、理解が及ばず、ぼんやりとしたイメージしかなかったため、「向かいのアパルトマンの赤子の声」という記憶違いが生じたのだろう。いっぽう「寄T.S.」は一句が５文字、全体で42句からなる韻文であるが、字句は平易で訓読することもできる。作中の紗良もこの詩について次のように書いている。

> 「只因心相印　従此不能忘」の句の意味は、お互いの心に刻まれた、という意味なら、それは兪の想いこみである。しかし「君は月のような眼を有し、君は若虹のような唇を有し、君の性格は若竜のようだ〔原文は「君有眼如月, 君有唇若虹」「霊活君若龍」：引用者注〕」という言葉にはやはり悪い気はしなかった。[10]

「寄T.S.」には、この他にも、「別君如離日 , 従此天無光（君と別るるは太陽と離るるがごとし、これより天に光なし）」、「我顔為君瘦, 我心為君瘋（我が顔は君がために細らん、我が心は君がために狂わん）」といった、一目瞭然のストレートな愛情表現が連ねられている[11]。朝吹はこの五言詩ラブレレターを受け取り、内容もかなり正確に理解することができたが、徐訏に対しては終始一貫して友だち以上の感情を抱くことはなかった。

徐訏が朝吹との交際期間中に書いた詩は、「偸望」（1937年12月15日）、「寄T.S.」（1938年1月2日）の他に、もう一首「漫感」（1937年12月27日）がある。呉義勤・王素霞は、この詩を帰国前夜、朝吹から求婚を拒絶されたときに書いたものと推測している[12]。この詩の7、8行目には、「我心絃絲絲都被奏断, 髪也因此慢慢地脱落。（私の心の弦は千切れてしまい、髪も次第に抜け落ちてしまった）」という失恋の辛い心境が書かれている。9〜12行目には「但是我忍耐, 並且期待, 像枯枝期待緑, 頑石期待青苔, 在悠悠的秋冬間, 大家忍耐著寂寞。（しかし私は耐え忍び、期待する、枯れ枝が緑を待ち望み、石ころが苔を待ち望むのと同様に。長々しい秋と冬、誰もが寂しさを耐え忍ぶ）」という、未来へ希望をつなぐ言葉が書かれている。末尾の23、24行目では、「到処是流水奏来了春, 但春掩不去腐葉与枯骨的寂寞！（到る処、流水の調べとともに春が訪れる。しかし春は腐った葉と骸骨の寂しさを覆い隠すことはできない）」という、未来への不安が書かれ

ている[13]。

帰国の途上で作った詩「寄T.S.」は朝吹が読むことを想定していたため、末尾には「黙黙望蒼天, 唯祝会面早。(黙々と蒼天を望み、ただ再会の早からんことを祈る)」という、再会を願う気持ちが綴られているが、朝吹から求婚を拒否された直後に書いた詩「漫感」には、辛い心境とともに、未来への期待と不安が入り交じる思いが綴られている。

徐訏は1948年、千頁近い詩集『四十詩綜』(上海・夜窓書屋)を出版する。この詩集の上函には『借火集』、『灯籠集』、下函には『幻襲集』、『進香集』、『末了集』が入っている。「偸望」、「漫感」、「寄T.S.」は『幻襲集』に収録されたが、『幻襲集』は重版のさいに『待緑集』と書名が改まる[14]。書名『待緑集』は、「漫感」の「像枯枝期待緑, 頑石期待青苔」に由来することからも、徐訏がこの詩に対して強い思い入れがあったことがうかがえる。

3、徐訏小説作品に投じられた朝吹登水子の影

徐訏は1938年1月、帰国するが、重慶へは行かず、上海に留まり本格的な作家活動を開始する。1941年、趙璉と離婚、同年12月、太平洋戦争が勃発、上海の英米仏租界は日本軍が進駐して統治下に置かれる。徐訏は単身、上海を離れ、各地を転々としながら重慶に到着する。重慶では1943年、大作『風蕭蕭』を新聞に連載、一大ブームを巻き起こし、圧倒的な知名度と人気を誇る作家となった。

『風蕭蕭』は一人称小説で、語り手は徐訏を彷彿させる「徐」という人物である。日中戦争時期の上海を舞台として繰り広げられる熾烈な諜報活動が描かれているが、作品中に「朝村登水子」と名乗る日本側諜報員が登場する。杉村安幾子は、この日本側諜報員が殺されることについて、「それは徐訏にとってパリでのつらい片恋との訣別を意味していたのではないだろうか。作中で朝村登水子を殺すことが、自分を振ったゆえに徐訏の心に強く残っていた朝吹の影を追い払うことにつながった、と深読みすることができないだろうか」と述べている[15]。しかし筆者は、徐訏が日本側諜報員に朝村登水子という名前をつけたのは、朝吹の影を追い払うためではなく、朝吹に対する綿々たる情を心の奥に留め続けていたため、かつてパリのカフェで交わした会話を懐かしく思い出し、『風蕭蕭』の中で再現させたのではないかと考える。『愛のむこう側』では、兪から名前を尋ねら

れた紗良が「紀川紗良」と名乗ると、兪は「チチュアン・サリャン、美しい名前ですね」と応じる。いっぽう『風蕭蕭』では、仮面舞踏会で徐から名前を尋ねられた日本側諜報員は「朝村登水子」と名乗り、それに対して徐は「なんて美しい名前だ」と応じる。

日本側諜報員は郎第儀という本名の他に、宮間美子、秋雨三郎、朝村登水子という名前を使い分けている。宮間美子、秋雨三郎、朝村登水子、この3つの名前はいずれも、中国人読者が漢字を見たときに美しいイメージを抱きやすい名前となっている。徐訏は、主人公が初対面の日本人女性に名前を尋ねるシーンを考えるさい、パリでかつて交わした会話を思い起こし、「美しい名前」・朝吹登水子の一字を違えて使うことを思いついたのではないだろうか。

『風蕭蕭』ほど明らかではないものの、朝吹からの影響を感じさせる小説がもう一編ある。徐訏は1940年3月14日、中編小説『吉布賽的誘惑（ジプシーの誘惑）』を脱稿、上海の夜窓書屋から出版する[16]。フランスから帰国後、徐訏は、異国情緒とロマン主義的な作風を特徴とする作家として人気を集めるが、その代表作が『吉布賽的誘惑』である。増刷を重ね、1948年9月には20版に達したことからもその人気のほどがうかがえる[17]。『吉布賽的誘惑』のあらすじを紹介する。

私はパリからマルセイユへ行き、そこでしばらく滞在したのち船で中国へ帰国するつもりだった。しかしジプシーの女性・羅拉の紹介で、ファッションモデルをしているフランス人美女・潘蕊と知り合い、その魅力に惹きつけられる。二人は紆余曲折を経て結婚、中国へ向かう。

中国到着後、潘蕊は私の実家で暮らすが、言葉が通じず、習慣も異なり、孤立する。笑顔が失われ憔悴が目立つ潘蕊を心配した私は、二人で地方に移り住むが、潘蕊は憂いの表情を浮かべたままだった。

私は潘蕊とともにマルセイユに戻ることを決意する。マルセイユでタバコ会社のモデルとなった潘蕊は脚光を浴び、生き生きとした毎日を取り戻す。いっぽう蟄居して悶々と暮らす私は、心が蝕まれていく。

私はジプシーたちとともに、アメリカへ渡ることを決意する。ジプシーたちとの生活は自由で心地よく、伸び伸びと過ごすことができた。私はさらにジプシーたちとともに南米に移動することを決意、そのことを潘蕊に告げると、潘蕊もフランスでの生活を捨てて南米へ行くことを決意する。その後、私と潘蕊はジプシ

ーたちとともに自然に身を委ね、自由気ままに流浪する生活を送ることとなる。

この小説の中の「私」はパリからマルセイユ経由で帰国する中国知識人青年で、同じルートで帰国した徐訏を彷彿させる人物となっている。いっぽう、潘蕊はマルセイユ在住のフランス人モデルで、家が貧しいため売春もしている。朝吹とは、容姿端麗である点を除き、何ら接点がない。しかし帰国が迫る中、理想の女性と巡り会い魅了された「私」が、その女性に積極的にアプローチするという姿は、徐訏の姿と重なる。『吉布賽的誘惑』には、潘蕊と初めて会った日の「私」の心境が次のように書かれている。

> この最高の美女をあのときすぐに好きになったのかといわれると、それは正しくない。でも彼女を忘れることができない、というは本当である。入り乱れたこの世において、この印象に取って代わることのできる物や人はないからである。もっともはっきりした理由は、私がまもなくこの土地を離れようとしていて、今後一生彼女に会うことができないかもしれないということである。そうであるならばどうしてチャンスを生かして彼女のところを訪ねないでいられようか。[18]

この「私」の心境は、朝吹と出会ったときの徐訏の心境とも重なると思われる。徐訏もいま気持ちを伝えなければ二度と機会がなくなるという思いにかられ、勇気を出して朝吹に近づき、交際を求めたのであろう。しかし、徐訏と朝吹は結婚に至らなかったのに対して、『吉布賽的誘惑』の「私」と潘蕊は結ばれ、ともに中国へ向かう、という違いがある。「私」は中国で暮らすようになった潘蕊が環境に適応できず、悩み苦しむ様子を見て、潘蕊との中国での生活を断念するが、徐訏も、もしあのとき朝吹が求婚を受け入れ中国での暮らしを始めていたならば、という想像をめぐらすこともあっただろう。そしてそのことが『吉布賽的誘惑』執筆の背景にあったと考える。

この小説の冒頭には「献辞」がある。4連の詩で、第1連は「私はいまだ私が受けた苦しみを記してないし、心の底の哀しみや胸中の憤りも記してないが、どうかまず青春が消え去りつつある道の途中で、私がどんなに愚かだったのかを記させて欲しい」、第4連は「ではまず私に物語を、次に夢を語らせてほしい、その

あとで、清らかで静かな月夜を選び、あなたに詩を語りたい」となっている[19]。誰に献じたかは明記されていないが、内容から判断するに、朝吹である可能性も十分考えられる。

4、香港での再会

徐訏は1944年、『掃蕩報』特派員としてアメリカに駐在、1946年、帰国する。1949年、葛福燦と再婚して一女をもうけるが、共産党政権下で暮らすことに不安を覚え、1950年、単身、香港へ避難する。妻と娘を呼び寄せるつもりでいたが、中国本土と香港の間の自由な往来が閉ざされたことにより、一家離散を余儀なくされる。1954年、葛福燦と離婚、張選倩と再々婚して一女をもうける。

1958年、徐訏と朝吹登水子は再会を果たす。再会のあと、朝吹は随筆「中国人の友」を発表、再会に至る経緯や再会時の様子などについて書いた。徐訏は香港移住後、朝吹の東京の実家宛に手紙と詩集、小説1冊ずつを送る。その手紙がパリの朝吹のところに転送され、その後二人は2、3度文通するが、連絡が途切れた。しかし、1958年秋、朝吹がパリのアパートを引きあげるため書類を整理しているときに、偶然、古い住所録を発見、徐訏に手紙を書き、帰国の途中で香港に寄港することを知らせる。同年12月、二人は香港で21年ぶりの再会を果たすが、そのときの徐訏の様子について、朝吹は次のように書いている。

> 陳〔徐の仮名：引用者注〕は、学生の頃と同じ動作や微笑を未だに持っていた。が、私の心を打ったのは、二十年後の私達の再会や、その二十年の老けではなく、彼の眼の下を隈どっている、一人の人間の、深い不幸の翳だった。〔中略〕
>
> 〝亡命している人間ほど不幸な人間はいない……。戦時中、僕は新聞社から派遣されてアメリカに行きました。戦争がやっと終った時、僕はアメリカの大学の恵まれた条件を振り切って、新しい中国を建設しようと大きな希望を持って祖国に帰って行きました。しかし、僕は、作家の言論の自由が認められない処には断じて住めない。中国には永久に帰ることがないでしょう。香港やシンガポールの中国人達は大部分が商人で、娯楽本位のものしか読みません。でも、僕は、暁方の二時から起き出して、朝の八時まで詩や小説を

書いています"

二十代の希望に燃えた瞳はなく、ただそこには、不幸に傷ついたにがにがしさと、憎悪のみがあった。[20]

徐訏は中国共産党政権下にある本土を逃れ、自由を求めて香港にやってきたものの、商業と娯楽を重視する香港社会に馴染むことができず、広東語も身につけようとしなかった。上海では、人気作家として脚光を浴び、八面六臂の活躍をしていたが、香港では創作に打ち込むものの、期待していたほどの反響を得ることができなかった。また生活の基盤をゼロから整えなければならず、経済的にも余裕がなかった。さらに中国本土に残した妻と娘と生き別れになるという深い悲しみにも襲われた。1954年には三度目の結婚をして、子どもにも恵まれるが、徐訏にとって香港での生活は不本意なものであり、根無し草のように漂う不安や悲しみを払拭することはできなかったと思われる。徐訏は、朝吹と再会したさい、このような自分が抱え込んでいる苦悩を率直に打ち明けた。

朝吹は『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』の中でも香港での再会について触れている。再会時、朝吹は徐訏から、戦争中に上海からクーリーに扮装し、日本側の監視の目をくぐり抜け、六ヵ月かけて重慶に移動したこと、そしてそのさいに、「僕はあなたの住所を隠して持って歩いていた」ことを告げられた[21]。徐訏は結婚を断られたものの、朝吹への思いを断ち切ることができず、1938年1月、朝吹への愛を綴った詩を書いて送ったが、それだけでなく1942年5月、日本軍占領下の上海を逃れ重慶へ移動するさいにも、朝吹との連絡手段を失わないために住所を隠し持っていたのである。また1950年5月、上海から香港へ脱出するさいにも朝吹の住所を携え、香港到着後、朝吹へ手紙と著書2冊を送った。時間の経過とともに、パリ時代の激しい恋愛感情も薄れ、穏やかな感情へと置き換わっていったはずである。香港移住後に連絡をしたのは、作家として活躍している自分の近況を知らせるとともに、自分がかつて恋い焦がれた憧れの女性の近況を知り、旧交を温めたいという気持ちだったのかもしれない。

1958年、徐訏と朝吹登水子が香港で再会したとき、二人にはそれぞれ三度目の結婚で結ばれた妻と夫がいた。また徐訏は著名な作家となり、朝吹もフランソワーズ・サガンの小説『悲しみよこんにちは』（新潮文庫、1955年）の翻訳が大きな反響を呼び、翻訳家としての実力が広く認められるようになっていた。新し

い家庭を築き、文筆家として活躍を続ける二人は再会を契機に、交流が復活する。

5、徐訏宛朝吹登水子書簡

香港で再会した徐訏と朝吹登水子は、徐訏が逝去するまで、書簡の往復を通じて親交を深めてきた。徐訏が朝吹に宛てた書簡は、朝吹家側には残されていない。唯一、徐訏と朝吹の共通の友人・鮑耀明が発表した「談徐訏早年一段異国情縁」(『香港文学』162期、1998年6月)の中に、徐訏の朝吹登水子宛英文書簡(1959年7月2日)の写真が掲載されているが、文字が鮮明ではなく、判読不能である。いっぽう、朝吹の徐訏宛書簡は徐訏の娘・徐尹白のところに18通保管されている。年代別に整理すると次のようになる。

1966年①6月4日
1977年②6月1日、③6月14日、④7月4日、⑤9月12日、⑥12月31日
1978年⑦1月3日、⑧2月2日、⑨2月8日、⑩3月14日、⑪4月27日、⑫12月19日
1980年⑬2月2日、⑭2月24日、⑮3月15日、⑯3月30日、⑰5月25日、⑱10月24日

書簡は晩年に集中している。1976年以前にも文通がおこなわれていた可能性が高いが、徐尹白が保管する徐訏遺品の中に残っていたのは、1966年の1通だけである。18通の書簡は、フランス語で書かれたものが①、②、⑪、⑮の4通で、それ以外は英文である。ハガキは⑭、⑯で、それ以外は便箋である。日本(東京・軽井沢)で投函されたものは④、⑤、⑧、⑨、⑬、⑭、⑯、⑱の8通で、それ以外はフランス(ヴェルサイユ)で投函された。

書簡はいずれもそれほど長くなく、内容も近況報告が中心である。現在手がけている仕事の説明、著書受領のお礼、著書送付の連絡などが記されていることから、徐訏と朝吹は新著を送り合うとともに、同業者として互いの仕事に関心を向け、励まし合っていたことがわかる。また来日予定の徐訏に対して、デザインやサイズを手書きで描いた図を添えて、九龍の中国国営デパートでシルクの下着を買って来てほしいと依頼する書簡もあり、信頼すべき友として、心置きなく語り合うことのできる間柄であったことがうかがえる。徐訏が1977年7月に東京、

1980年6月にパリ、朝吹が1980年3月に香港を訪れたさいには、事前に連絡を取り合い、再会を果たしていたことも確認できた。

朝吹書簡には、『愛のむこう側』に関する言及もある。朝吹は『私の巴里物語一九五〇～一九八九年』の中で、『愛のむこう側』に登場する兪という人物の名前の由来について、「今から十年余り前に彼〔徐訏：引用者注〕が中国文学の学会で東京に来た時、彼自身が自分に命名したのである」と書き[22]、鮑耀明は「想起徐訏」の中で、「1978年、徐はペンクラブに参加するために東京に赴いたさい、朝吹と会い、自伝的小説のことを知った。そして徐訏の替わりに「兪」という字を使うように求めた」と書いた[23]。これまで日中両国の研究者が徐訏と朝吹の関係について論じるさい、この朝吹と鮑耀明の記述が参照されてきたが、事実と異なることが朝吹書簡によって明らかになった。朝吹は1977年6月1日の書簡で、自伝的小説を出版する予定であることを知らせ、徐訏の詩「寄T.S.」の引用許可を求めるとともに、「徐」という名前を別の名前に変えることを希望するか尋ねた。同年6月14日の書簡では、名前を「兪」に変更したこと、そして9月に出版されることを伝えている。「兪」という名前は、来日時ではなく、1977年6月の書簡のやりとりの中で徐訏が名付けたのである。

1977年12月31日の書簡では、『愛のむこう側』の反響について次のように書いている。

> 私の本を読んだ日本人少女から手紙を受け取りました。手紙には兪の旅立ちにとても感銘を受け、彼の悲しみを思うと泣いてしまったと書かれていました。昨日、私の友人（女性）から、私の小説の登場人物の中で兪がもっとも好きだと書かれた手紙が届きました。私は中国人青年のシルエットが読者の心に深く刻まれたことを嬉しく思っています。彼女はまたあなたの詩が好きだともいってました。

『愛のむこう側』第四章「パスカル」には、「紗良が愛した繊細なヨーロッパの美と文化の結晶であり、彼女が少女の頃から漠然とながらも胸に描いていた夢の男性像の具現[24]」であるフランス人男性パスカルとの華やかでロマンチックな大恋愛が描かれているのに対して、兪との交遊が描かれているのは第三章「カルチェ・ラタン」の一部分に過ぎない。しかし、朝吹のもとに届いた読者の手紙にも

書かれていたように、兪の紗良に寄せる一途な思いや抗日と愛情の狭間で揺れ動く姿は読者の胸に切々と迫ってくるものがある。

1978年1月3日の書簡では、『愛のむこう側』を中国語に翻訳してくれる人がいるならば嬉しいと書かれていることから、徐訏から朝吹に中国語版出版の話を持ちかけたと思われる。徐訏は1979年2月7日の鮑耀明宛書簡の中でも、「以前お貸しした朝吹登水子の小説はすでに読み終わったことと思います。どうかお戻し下さい。この本の翻訳に興味を示す友人がいて、読むことを希望しているからです」と書いている[25]。このように徐訏は、『愛のむこう側』の中国語版出版を実現させるために尽力していたが、残念ながら生前には実現しなかった。この小説は1987年、王玉琢によって翻訳され、『愛的彼岸』というタイトルで湖南人民出版社から出版された。

1979年12月19日の書簡では、『愛のむこう側』の映画化に2、3人が興味を示していると書かれているが、映画化は実現しなかった。また同書簡は、1952年から1968年を時代背景とする『愛のむこう側』の続編執筆を計画していることも伝えている。続編『もうひとつの愛』は1987年、読売新聞社から出版されたが、時代背景は当初の予定が大幅に変更され、1950年から1955年となっている。そのため、過去の回想場面で兪の名前が出てくる箇所が三カ所あるものの、香港での再会など戦後の兪との交流については描かれていない。

6、ヴェルサイユでの別れ

徐訏は1980年６月にパリで開かれる中国抗日戦争時期文学会議への出席が決まったことを朝吹登水子に知らせたのであろう。朝吹は、1980年2月2日の書簡で、6月16日～18日ごろにパリにいらっしゃると知り嬉しいです、よろしければヴェルサイユの拙宅にお泊まり下さい、ヴェルサイユからパリまでは電車で23分です、と書いている。

朝吹は1980年3月20日～23日、香港を訪れ、徐訏と再会する。2月24日と3月15日の書簡は香港旅行についての連絡、3月30日の書簡は香港での歓待に対する礼状である。徐訏の1980年3月22日の日記には、朝吹の宿泊先のホリデイ・インに迎えに行き、ペニンシュラホテルでランチを食べ、中芸公司でのショッピングに案内し、海を渡ってヴィクトリア・ピークでお茶を飲み、宿泊先まで送った、と

書かれている。3月28日の日記には、「Tomikoに手紙を書いた、明日、詩とともに送る」と書かれている。

1980年5月25日の書簡は、徐訏が受け取った最後の書簡である。全文を翻訳して紹介する。

親愛なるHsu

手紙と詩のフォトコピー、ありがとうございました。あなたの詩が成功を収め、歌にもなったことを知り、嬉しく思います。パリへいらっしゃるつもりですか？もしそうでしたら、知らせて下さい。あなたにお伝えしたように、どうかヴェルサイユに来て、私たちのところに滞在してください。

ご存じのように、私の友人のサルトルが4月に亡くなりました。私はとても悲しく、落ち込んでいました。なぜなら彼はとても暖かい心をもつやさしい男性だったからです。ですので、私は誰にも手紙を書かず、ほとんど誰にも会おうとしませんでした。これがあなたにこれまで手紙を差し上げなかった理由です。

私は私の小説の続編を書いています。私の中国人の友人・兪の名前・兪○○を考えていただければ幸いです。私は中国語の素敵な名前を知らないからです。それからあなたが重慶に向かったさいに通過した町の名前（杭州など）を知らせて下さい。あなたは東京の和食レストランで私に語ってくださり、その時のメモが東京に残っていると思いますが、ここにはありません。私は京劇を観ましたが、俳優はあまり上手ではありませんでした。文化大革命の空白があったからだと思います。私は7月5日に東京へ行きます。

友情を込めて

Tomiko Asabuki

徐訏は朝吹宅には宿泊しなかったが、1980年6月21日、当時パリで留学していた娘の尹白とともにヴェルサイユの朝吹宅を訪問する。このとき徐訏は体調が良くなく、咳をしていた。徐訏はフランス訪問のあと、イタリアを旅行して香港へ戻る。8月に入院、検査の結果、肺癌であることが判明、10月5日に逝去した。

朝吹は徐訏が病死したことを知らず、10月24日、手紙を出す。手紙の冒頭に「ヴェルサイユ以降、いかがお過ごしですか。東京から雑誌が一冊届いたことと

思います。私はヴェルサイユでの再邂逅について書きました」[26]と書かれていることから、徐訏から雑誌受領の連絡がこないことに不安を覚えて手紙を出したのだろう。末尾は、「風邪がイタリアでこじれることなく、無事に香港へ戻ることができたことを祈っています」という徐訏の体調を気遣う文で終わっている。朝吹はその後、鮑耀明から、徐訏の死を知らされた。

7、終わりに

徐訏と朝吹登水子の交遊は断続的ながらも43年間続いた。朝吹は父親がイギリス留学経験者で、朝吹自身も3歳から同居するイギリス人家庭教師に英語やイギリス上流階級の作法を習うなど、西洋文化に慣れ親しみながら育った。杉村安幾子が「兪との出逢いが、日本の中国侵略と戦争を背景として、紗良に戦争や侵略、民族や人種について深く考えさせる重要な契機」になったと指摘するように[27]、『愛のむこう側』には、紗良が兪との交流を通して、戦争状態にある日本と中国との関係や中国の人々が置かれた厳しい現状に目を向け、思考をめぐらす様子が描かれている。

朝吹登水子にとって徐訏はもっとも親しく、もっとも長期間にわたって交流を続けた中国人であった。1937年、救国のためにパリ留学を切り上げ帰国するさい、結婚して重慶に来てほしいとプロポーズした徐訏、戦争中の移動のさい、危険を顧みず朝吹の住所を書いた紙を隠し持った徐訏、1950年以降中国に戻ることができず、香港で根無し草として生きることを余儀なくされた徐訏、このような徐訏の姿は、朝吹の心に鮮烈な像を結ぶとともに、時代の大きなうねりの中で翻弄され、もがき苦しむ中国の人々に思いを致すことにもつながったであろう。朝吹登水子は1978年、中国のどこを訪問したいか、という週刊誌のアンケートに対して、北京と大同の地名を挙げたほかに、ソルボンヌ大学留学時代の中国人留学生の男友だちが、戦争中、上海から重慶まで「六か月もかけて歩いた道のりを、私もたどってみたいと思っています」と書いた[28]。また、1982年秋、日中文化交流協会の訪中代表団の一員として10日間中国を訪れるが、帰国後に書いた随筆の中でも、1937年パリで出会った北京大学哲学科卒の中国青年が自分に思いを寄せてくれたこと、戦時中、上海から重慶に向かうさい朝吹の東京の住所を隠し持っていたことなどについて触れたあと、「あの一九三七年から四十五年経

って、私は、初めて、心の中に在った中国を肌で感じてうれしかった」と書いている[29]。

徐訏は、大学在学中から文学作品を発表、大学卒業後は作家・編集者として経験を積む。1937 年には中編小説『鬼恋』を発表、その特異な文学世界が多くの人々の心をつかみ、「鬼才」と称されるようになった。1937 年、徐訏は新進作家として足元を固めつつあり、また 1935 年に結婚した趙璉との間には息子もいたが、異国の地で朝吹と巡り会い、その魅力にすっかり魂を奪われ、既婚者であるにもかかわらず、いっしょに重慶へ行こうとプロポーズする。このような朝吹との交際の中から三首の詩「偸望」、「漫感」、「寄 T.S.」が作られた。

帰国後、徐訏は『吉布賽的誘惑』（1940 年）を発表する。この作品には、中国人男性と結婚して中国で新婚生活を始めたフランス人女性が言葉や文化の違いにより孤立を深め、輝きを失っていく様子が描かれているが、朝吹が自分と結婚して中国へ赴いていたならばという想像がこの作品誕生の背景にあると思われる。また『風蕭蕭』（1943 年）には、「朝村登水子」と名乗る「美しい名前」の日本側諜報員が登場する。

徐訏と朝吹登水子のパリでの交際はごく短い期間ではあったが、密度の極めて濃いものであった。二人の交際について、朝吹は小説『愛のむこう側』の中で生き生きと再現し、徐訏は詩「寄 T.S.」の中で朝吹に寄せる恋愛感情の高まりを大胆に綴った。また徐訏の詩「偸望」、「漫感」や小説『吉布賽的誘惑』、『風蕭蕭』からも二人の交際の痕跡を読み取ることができる。徐訏と朝吹は、21 年後の 1958 年、香港で再会する。二人はその後も、文通を交わし、新著を送り合い、それぞれが東京、香港、パリを訪れるさいには会って旧交を温めた。

徐訏は生涯三度結婚した。また朝吹の他にも親しい関係にあった女性が複数いたとされる[30]。1975 年に陳乃欣が徐訏にインタビューをおこない、婚姻状況を尋ねたとき、徐訏は「私は二度結婚しています。一度目の結婚は長く続かず、離婚後、十年たって二度目の結婚をして、いまに至ってます。息子は台湾にいて、娘は去年フランスへ留学に行きました」と答えた[31]。インタビューでは、一度目の趙璉、三度目の張選倩との結婚にだけ触れ、二度目の葛福燦との結婚は伏せられている。また趙璉との間に息子・徐尹秋と娘・徐清夷、葛福燦との間に娘・葛原、張選倩との間に娘・徐尹白が生まれたが、インタビューで言及されているのは徐尹秋と徐尹白だけである。伝記作者の呉義勤・王素霞は、「徐訏の伝記研究

において、彼の愛情と婚姻の問題はずっと神秘的な領域であった。徐訏は自分の散文や回想の中でこの方面の内容について触れることがほとんどなかったからである。また彼自身がたまにこの方面の事情について語るときも、矛盾が生じていたからである」と書いている[32]。このように徐訏は恋愛や結婚に対して、特異な考え方や秘められた感覚をもっているように思えるが、拙論は、この神秘的な領域に迫る手がかりとして、徐訏と朝吹登水子が 1937 年パリで出会い、1958 年香港で再会し、1980 年ヴェルサイユで別れるまでの長期にわたる交遊の歴史を、これまで未公開だった朝吹書簡と徐訏日記、先行研究では言及されてこなかった朝吹の随筆「中国人の友」（1959 年）などの新資料を組み入れ、できる限り丁寧に跡づけることを試みるとともに、この交遊が二人の文学者にもたらした影響についても考察をおこなった。

〔後記〕徐訏宛朝吹登水子書簡の公表にご同意くださった牛場暁夫氏、並びに同書簡を整理して画像を提供してくださるとともに、朝吹登水子関連部分の徐訏日記公表にご同意くださった徐尹秋氏・徐尹白氏に深甚なる謝意を表します。

註

1　徐訏の著作は小説の他に、詩、散文、戯曲、評論などがあり、膨大かつ多様である。1966年～1970年、台北・正中書局から『徐訏全集』全15巻、2008年、上海・上海三聯書店から『徐訏文集』全16巻、2015年～2022年、台北・釀出版から『徐訏文集』全44巻が出版された。

2　杉村安幾子「徐訏と朝吹登水子」『お茶の水女子大学中国文学会報』36号、2017年4月、40頁。

3　徐訏の経歴については主に呉義勤・王素霞『我心彷徨 —— 徐訏伝』（上海三聯書店、2008年）を参照した。

4　朝吹登水子の経歴については朝吹登水子の著作『私の軽井沢物語 霧の中の時を求めて』（文化出版局、1985年）、『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』（文化出版局、1989年）、『豊かに生きる』（世界文化社、2002年）などを参照した。

5　朝吹登水子『愛のむこう側』、新潮社、1977年、67～68頁。

6　朝吹登水子『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』、文化出版局、1989年、28頁。

7　同書、31頁。

8　朝吹登水子『愛のむこう側』、91頁。
9　朝吹登水子『愛のむこう側』、73頁。
10　朝吹登水子『愛のむこう側』、91頁。
11　徐訏「寄T.S.」『待緑集』、釀出版、2021年、16頁。
12　呉義勤・王素霞『我心彷徨 ── 徐訏伝』、上海三聯書店、2008年、121～122頁。
13　徐訏「漫感」『待緑集』、釀出版、2021年、112～113頁。
14　徐訏「『待緑集』重版後記」『待緑集』、釀出版、2021年、188頁。
15　杉村安幾子、前掲論文、40頁。
16　『吉布賽的誘惑』は、吉田東祐によって日本語に翻訳された。「ジプシーの誘惑」（『進路』3巻7号～12号、1956年7月～12月）。
17　張露『現実関懐与自由立場 ── 徐訏文学編輯出版事業研究』、河北大学博士論文、2019年、60頁。
18　徐訏「吉布賽的誘惑」『鬼恋』、釀出版、2016年、94頁。
19　同書、77～78頁。
20　朝吹登水子「中国人の友」『三田文学』49巻3期（第二期）、1959年3月、3～4頁。
21　朝吹登水子『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』、30頁。
22　朝吹登水子『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』、29頁。
23　鮑耀明「想起徐訏」『大成』213期、1991年8月、42頁。
24　朝吹登水子『愛のむこう側』、123頁。
25　鮑耀明、前掲論文、46頁。
26　朝吹書簡には、ヴェルサイユでの再会についての文章を雑誌に発表したとあるが、該当する文章を見つけることはできなかった。
27　杉村安幾子、前掲論文、38頁。
28　朝吹登水子「北京と大同の雲崗」『週刊読売』37巻38号、1978年9月10日、44頁。
29　朝吹登水子「私にとっての中国」『現代』17巻4号、1983年4月、458頁。
30　馮芳「徐訏羅曼史叢考」（『華文文学』133期、2016年2月、110～114頁）では、重慶のキリスト教信者の女性、アメリカのユダヤ人女性、上海の京劇女優・言慧珠などと親しい関係にあったと書かれている。
31　陳乃欣「徐訏二三事」、寒山碧編著『徐訏作品評論集』、香港文学研究出版社、2009年、365頁。
32　呉義勤・王素霞、前掲書、69～70頁。